

## 北タイ班A

### タイ北部におけるヤオ族の生業とその変遷に関する生態人類学的研究 増野高司（総合研究大学院大学 生命体科学専攻）

キーワード：タイ北部，ヤオ族，生業，変遷

調査期間・場所：2003 年 10 月 19 日～11 月 15 日，パヤオ県北部ラオス国境付近

### A study of subsistence activities and its transition from 1980s to 2003 in the Yao hillside village, Northern Thailand

Takashi MASUNO (Grad.Univ.Advanced Studies Department of Biosystems Science)

Keywords: Northern Thailand, Yao, subsistence activities, transition

Research Period and Site: 2003, October 19- November 15, Phayao Province

#### 要約

本研究は、タイ北部パヤオ県に位置するヤオ族の村 P 村における、現在の生業を把握すること、そして 1980 年頃から 2003 年にかけての生業の変遷を把握することを目的とした。その結果は以下のとおりである。

①村内で行われている生業として、農耕（トウモロコシ栽培，陸稲栽培，その他の農作物の栽培），家畜飼育（ウシの飼育，ウシ以外の家畜の飼育），その他の生業（狩猟および採集，出稼ぎ）を確認した。換金用のトウモロコシの栽培が村での主な生業となっている。出稼ぎについて台湾と韓国へ出稼ぎに出ている者を各 1 名ずつ確認した。

②村の主な生業は 1980 年頃には焼畑だった。しかし 2003 年には焼畑は行われておらず，化学肥料と除草剤が利用されるようになっている。同時に換金作物は 1980 年頃のケシから 2003 年のトウモロコシへと変化した。ウシの林間放牧は 1993 年頃から始まった新しい生業である。これらの変化を土地利用の面から見てみると，1980 年頃には畑地は焼畑によって村の周辺に広く分布していたのに対し，2003 年には畑地は村の北側の標高 1000 m 以下の地域に集中するようになっている。また，村の南側の森林はウシの放牧地としてのみ利用されるようになった。

③森林局が行った森林と農地の区分や政府によるケシ栽培の取り締まりが上記の変化に関して大きな影響を与えたことが考えられる。しかし，今回の調査では変化の要因についての十分な情報を集めることができなかった。生業の変化に対する村民の対応はトウモロコシの栽培を行う者，出稼ぎに出る者，ウシの放牧を始める者など様々であり，変化の要因も様々であると推察される。

#### 1. 研究の目的および方法

本報告は，タイ北部ヤオ族（\*）の村における現在の生業とその変遷を把握することを目的とする。筆者は，パヤオ県 P 村の生業の実際および 1980 年頃から 2003 年にかけての生業の変遷について把握する。

筆者は 2003 年 10 月にチェンマイ大学 GIS センターにおいて，タイ北部，特にイン川上流域の森林の分布および村の分布について GIS を用いた分析を行った。その後，その分析結果をもとに，現地のヤオ族の村を 6 村訪問し，調査村をヤオ族の村 P 村に決定した。

調査は筆者が P 村内の F 家に住み込むかたち実施された。村での滞在日数は 20 日間である。本来は村落全戸に関して調査を行うべきであるが，時間の制約から F 家を中心とした調査となった。調査はタイ語を用いて行った。

2. 調査地の概観

P村はパヤオ県、メコン川へ流れ込むイン川の支流の1つ、ユアン川の最上流域に位置している(図1)。周辺には標高1000mを超える山々が見られ、標高によって熱帯落葉混交林や低地山地林が広がっている。ユアン川の北側に位置する山の尾根線はラオスとの国境となっている。また、P村を含む一帯は自然保護区に指定されている。

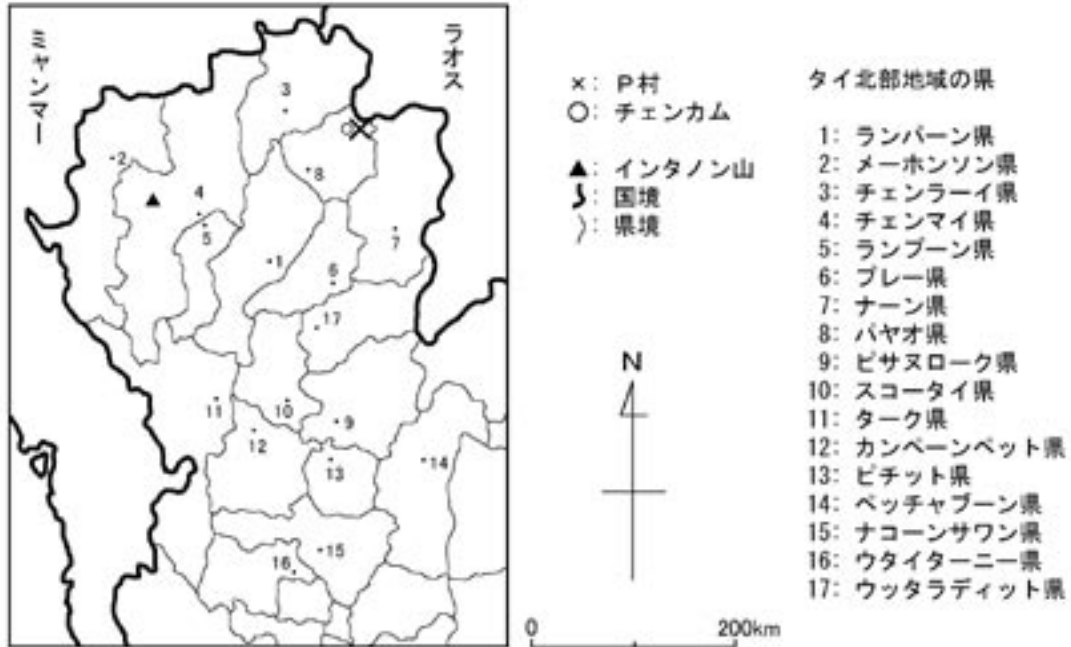


図1. タイ北部地域および調査地

P村は20戸から構成されている。村の人口構成を図2に示した。人口は男性が76人、女性が54人の合計130人である。若年層が多いが、村外の学生寮で生活している者も多いため、村内には中年以上の成人と幼児の姿が目立つ。

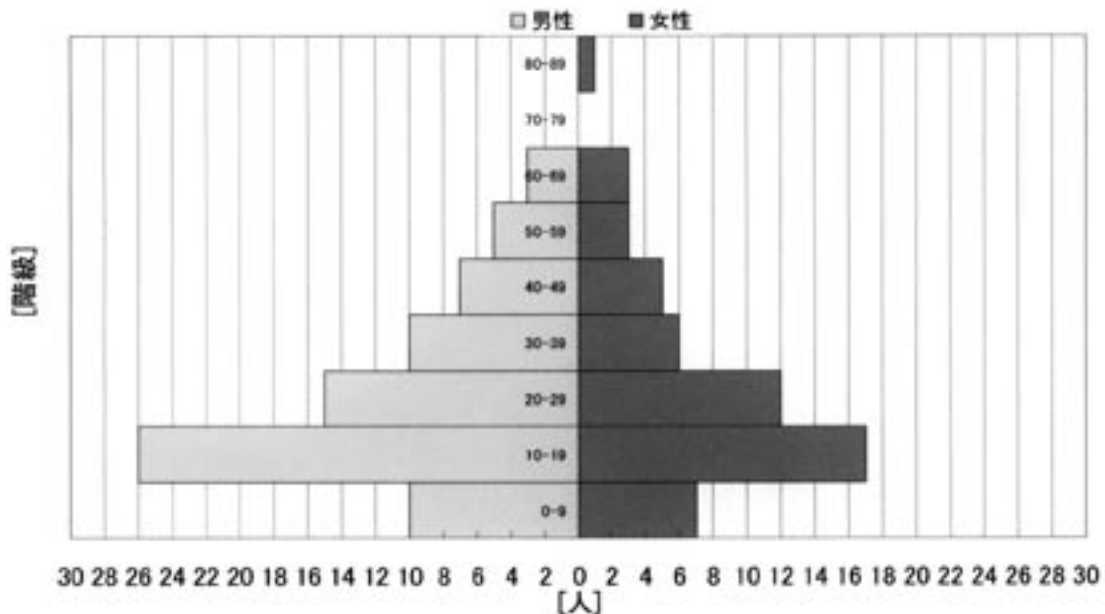


図2. 2003年のP村における年齢10才階級別人口 (筆者作成)

村内に見られる土地利用について見てみると、村内の土地利用の様式は景観によって、畑地と森林に区分される。森林についてはさらに、マツ林、タケ林、シイ林、「休閒林」の4つの景観に区分された。

P村における2003年の土地利用の断面模式図を図3に示した。P村は標高約950mに位置している。尾根

部は標高約 1350 mだが、P 村の南側に見られる最も高い山の標高は約 1500 mである。P 村の周辺にシイ林が見られる。村よりも標高の低い、標高約 500 mから 900 mの地域に、トウモロコシ畑、マツ林、タケ林が見られる。「休閒林」(写真 4)は、村の南側、村よりも標高の高い地域に広がっている。このように P 村の人々は標高 500m から 1500m の地域を利用して生活している。

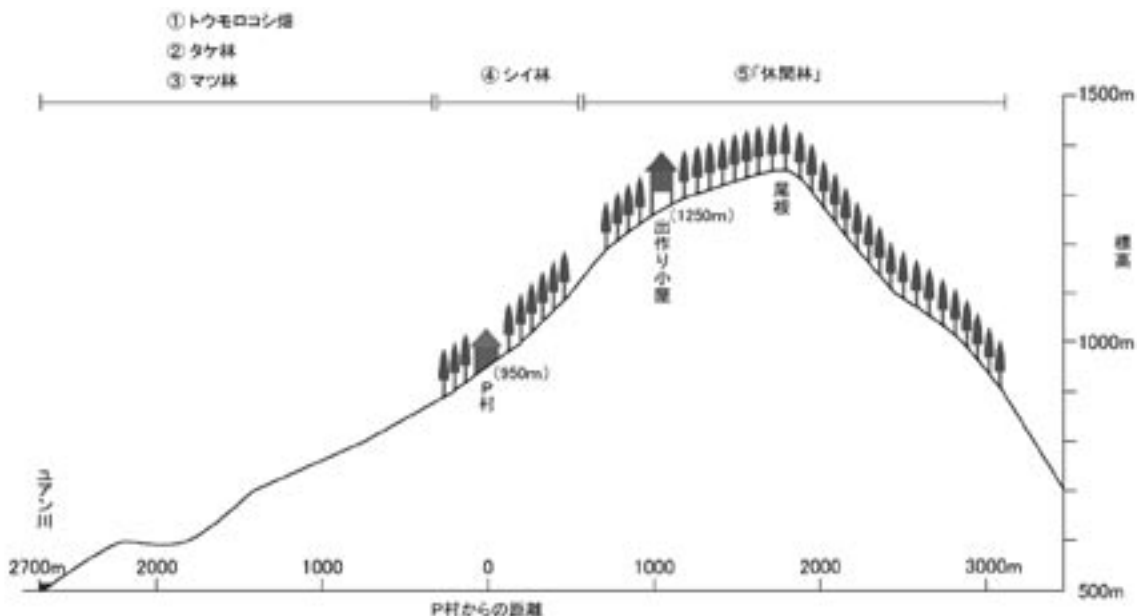


図 3. 2003 年の P 村における土地利用の断面模式図

(P 村からユアン川までと P 村から出作り小屋を結ぶ直線から断面図を作成)

### 3. 各生業活動

この章では 2003 年に P 村で観察された生業を、農耕、家畜飼育、狩猟および採集、その他の生業、に区分し、それぞれの生業の状況について説明する。

#### 1] 農耕

現在は、焼畑は行われておらず常畑となっている。村内には水田は見られない。畑地には主にトウモロコシと陸稲が栽培されている(写真 1)。トウモロコシが大面積に栽培され、トウモロコシ畑の間に陸稲畑が見られる。陸稲畑では主にうるち米が栽培され、もち米がわずかに栽培されている。

#### 1) 年間の農業活動

農業活動の実際について F 家の事例から報告する。F 家では、村の北側にトウモロコシ畑を 21rai (3.36ha)、村に隣接する場所にもトウモロコシ畑を 5rai (0.8ha)、さらに陸稲畑を 2rai (0.32ha) 所有している。聞き取りから F 家の畑地別の農事暦を作成した(図 4)。この農事暦を参照しながら、1 年間の農業労働についてトウモロコシ栽培、陸稲栽培、その他の農作物の栽培について説明する。

トウモロコシ畑は村の北側に大面積に広がっている。トウモロコシ畑では 1 月から 3 月の間に草刈りが行われる。刈った草は畑に放置し乾燥させ、4 月の下旬に焼却する。残っていた雑草と焼却以後再び現れた雑草を処理するために、5 月にもう一度草刈りを行う。6 月下旬にトウモロコシを播種する。1 人が地面に棒で穴をあけ、もう 1 人が穴にタネをまく。タネに土をかぶせることはしない。播種後、除草剤を散布する。8 月に窒素肥料を与え、10 月の収穫を待つ。この間、特に草刈り等は行なわない。

調査を行った 2003 年 10 月末は、トウモロコシの収穫期であった(写真 2)。F 家のトウモロコシの収穫では、村民による共同労働が行われていた。トウモロコシの収穫は全て手作業で行われる。収穫したトウモロコシは畑地内に作られた小屋に一時保管される。12 月に小屋に脱穀機を積んだトラックを横付けし、畑地内で脱穀を行

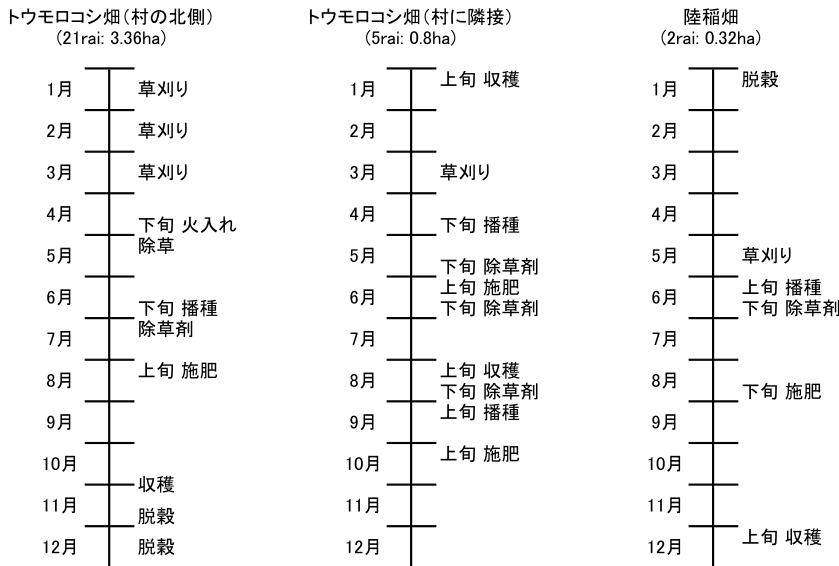


図4. 2003年のF家の農事暦  
(聞き取りにより筆者作成)

なうとのことだった。脱穀したトウモロコシは畑から直接チェンカムへ出荷される。また、村に隣接した畑ではトウモロコシが二期作で栽培されている。

陸稲畑では5月に草刈りが行われる。6月上旬には4tan(約72リットル)の種籾が播種される。そして6月下旬に除草剤が散布される。8月には施肥が行なわれる。陸稲の収穫は12月に行なわれる。現在でもジップと呼ばれる道具を用いて、穂摘みによる収穫が行なわれている(写真5)。籾で80tan(約1440リットル)の収穫がある。収穫された米は自家用に用いられ、販売はしていない。

自家用に用いられ、販売はしていない。

主な農作物であるトウモロコシと陸稲の他、村内ではキュウリやトウガラシなどが副次的に栽培されていた。また、村落内の家庭菜園では青菜類やトウガラシが自家用に栽培されている。この他、村落内には小規模であるがライチやリュウガンの栽培を行っている世帯も見られる。

## 2) 農耕による経済収支

P村の多くの家庭にとって農耕は大きな収入源であると考えられる。F家の事例から農耕による経済収支について見てみる。F家における2003年のトウモロコシの収穫高は、脱穀された状態で約10,000kgだった。そして、これを販売することによって、約40,000Bの収入を得ていた。トウモロコシ栽培に関わる支出として、トウモロコシの種子40kg(5600B)、窒素肥料(4800B)、除草剤(1800B)があげられる。また、陸稲栽培に関わる支出として、肥料(520B)と除草剤(1200B)があげられる。これらはチェンカムの商店で購入される。

F家では農耕によって2003年に、差し引き26,080B(約78,000円)の収入を得ている。またF家では農耕の他に大きな現金収入となる生業が見られない。このため、このトウモロコシの販売による収入がF家の主な現金収入源となっている。

## 2] 家畜飼育

P村ではほぼ全ての家庭で自家用にブタとニワトリを飼育している。また、村の南側の山に広がる「休閑林」(図3)を利用してウシの林間放牧が行なわれている。ウシの林間放牧は1993年頃から始まった。山腹(標高1250m)にはウシの飼育を行うための出作り小屋が設けられている。ウシは山の中に放し飼いにされる。2003年10月には、4世帯が60頭のウシを飼育していた。ウシは食肉用で、農耕には使われていない。また、ウシの乳は利用されていない。ウシはP村全体で毎年5頭から10頭販売されている。

## 3] その他の生業

狩猟が村の南側の林内において行われている。2003年10月28日には、ここからブタバアナグマ(*Arctonyx collaris*)が1頭採集された(写真3)。

F家では空いた時間を利用してトウゴマ(*Ricinus communis*)の種子を採取している。今回の調査では商業的な林産物の採集は観察されなかった。

P村は町から遠く産業がないことから、雇用労働はほとんどみられない。このため現金収入を求めて都市部や

国外へ出稼ぎに行く者もいる。2003年11月には村民のうち、14名がバンコク、1名が韓国、1名が台湾へ出稼ぎに出ている。

その他の生業による経済収支について見てみる。トウゴマの種子は1kgあたり14Bで販売される。トウゴマの販売は大きな収入にはなっていない。筆者の滞在中に採集されたブタバナアナグマは販売されず、村内の複数の家族に分配され消費された。出稼ぎによる収入は不明である。しかし出稼ぎ収入によって、村内で突出して裕福な世帯というものは見られない。

#### 4. 1980年頃から2003年にかけての生業の変遷

この章ではF家の事例を中心に1980年頃の農耕について述べ、次にP村における1980年頃から2003年までの生業の変遷について説明する。

##### 1] 1980年頃の生業

1980年頃にF家で行われていた生業のうち、農耕について説明する。当時F家では主に陸稲の栽培とケシの栽培を行っていた。いずれも焼畑によるもので、化学肥料や除草剤は用いなかった。1980年頃にはF家の畑地はユアン川流域に広く分布していた。村から遠く離れたの畑で耕作を行なう際には、畑の近くに出作り小屋を作り、そこで寝泊まりをしながら作業を行なった。

陸稲畑では、畑の一面を利用して飼料用のトウモロコシの栽培も行なわれた。陸稲畑の休閑期間はおよそ10年ほどだった。再び同じ畑に戻ってくるというよりも、休閑期間10年前後を目安に、休閑植生の状況を見ながら耕作可能な場所を見つけ、焼畑を行なった。

ケシは主に村の南側の山腹で栽培されていた。山腹ではトウモロコシの栽培も可能であったが、収益の面からトウモロコシではなくケシばかりが栽培された。当時ケシの販売は重要な現金収入源だったという。F家では3ヶ所のケシ畑を所有していた。1つのケシ畑の面積は、およそ2rai (0.32ha) と小さなものだった。同じ畑で3年間ほど連続で耕作し、ケシの育ちが悪くなると畑を移した。

##### 2] 生業の変遷

P村における主な生業は1980年頃には焼畑であったが、2003年には常畑での農耕へと変化した。同時に化学肥料や除草剤が使われるようになっていく。家畜飼育のうち、森を利用したウシの飼育は1993年以降始まった新しい生業である。村の南側の畑地として利用することができなくなった土地（「休閑林」）が放牧地として利用されている。

栽培作物について見てみると、ケシは1980年頃には盛んに栽培されていた。しかし、2003年にはケシは栽培されておらず、換金用にトウモロコシの栽培が大面積で行われるようになっていく。一方、陸稲については2003年においても自給用に栽培が続けられている。

1980年以降の村の出来事を見てみると、1985年頃から村への政府によるケシ栽培への取り締まりが始まっている。また、森林局が1991年にP村において森林と農地の区分を行っている。トウモロコシが換金用に大面積に栽培されるようになった背景には、これら政府による働きかけも大きな影響を与えていると思われる。なお村において1980年頃以降に行われなくなった生業については不明である。

#### 5. 結果

本研究は、タイ北部パヤオ県に位置するヤオ族の村P村における、現在の生業を把握すること、そして1980年頃から2003年にかけての生業の変遷を把握することを目的とした。その結果は以下のとおりである。

①村内で行われている生業として、農耕（トウモロコシ栽培、陸稲栽培、その他の農作物の栽培）、家畜飼育（ウシの飼育、ウシ以外の家畜の飼育）、その他の生業（狩猟および採集、出稼ぎ）を確認した。換金用のトウモロコシの栽培が村での主な生業となっている。出稼ぎについて台湾と韓国へ出稼ぎに出ている者を各1名ずつ確認した。

②村の主な生業は1980年頃には焼畑だった。しかし2003年には焼畑は行われておらず、化学肥料と除草剤が利用されるようになっていく。同時に換金作物は1980年頃のケシから2003年のトウモロコシへと変化した。ウシの林間放牧は1993年頃から始まった新しい生業である。これらの変化を土地利用の面から見てみると、1980年頃には畑地は焼畑によって村の周辺に広く分布していたのに対し、2003年には畑地は村の北側の標高1000m以下の地域に集中するようになっていく。また、村の南側の森林はウシの放牧地としてのみ利用されるようになった。

③森林局が行った森林と農地の区分や政府によるケシ栽培の取り締まりが上記の変化に関して大きな影響を与えたことが考えられる。しかし、今回の調査では変化の要因について議論するための十分な情報を集めることができなかった。生業の変化に対する村民の対応はトウモロコシの栽培を行う者、出稼ぎに出る者、ウシの放牧を始める者など様々であり、変化の要因も様々であると推察される。

#### 注

\*ヤオ (Yao もしくは Mien) 族は、中国南部からタイ、ベトナム、ラオスなどの山岳地帯に広く分布する少数民族である。タイへは19世紀以降、移り住んできたと考えられている [Tan Chee Beng 1975: 21-22]。1986年から1987年にかけての統計では、タイ北部地域に約36,000人のヤオ族の人々が生活しているとされる [Tribal Research Institute 1989: Tribal population summary]。近年のヤオ族の生業に関する研究では、焼畑が衰退し、換金作物であるトウモロコシやライチの栽培によるモノカルチャーが進んだこと [Jian 2001: 83-86]、焼畑の衰退に伴い出稼ぎが増加していること [吉野 2003: 159-163] が報告されている。

#### 引用文献

- Jian, L. 2001 「Development and Tribal Agriculture Economy in a Yao Mountain Village in Northern Thailand」 『Human Organization』 60(1): 80-94.
- Tan Chee Beng, 1975 The Yao People: An Introduction. In Walker ed., *Farmers in the Hills: Upland Peoples of North Thailand*, Data Papers in Social Anthropology, School of Comparative Social Sciences, Universiti Sains Malaysia. pp.21-31.
- Tribal Research Institute 1989 Tribal population summary. In: J. McKinnon and B. Vienne ed., *Hill tribes today*, White Lotus-Orstom:Thailand.
- 吉野 晃 2003 「タイ北部, ミエン族の出稼ぎ - 二つの村の比較から -」 塚田誠之編, 民族の移動と文化の動態 - 中国周縁地域の歴史と現在 -, 東京: 風響社, pp.159-192.

#### Abstract

This study aims to show subsistence activities and its transition from 1980 to 2003 on the Yao in Northern Thailand. The results are as follows.

① Subsistence activities found in the village are farming (Maize, dry dice and other crops), livestock husbandry (beef cattle, pig and chicken) and other activities (foraging and employed labor). Maize farming is the main cash income activity in the village. Two employed laborer work at Taiwan and South Korea is found.

② The main subsistence activities at about 1980 were dry rice farming and opium culture by shifting cultivation, while at 2003 subsistence activity was sedentary Maize farming by using chemical fertilizer and herbicide. The main cash crop was changed from Opium to Maize in these 20 years. Beef cattle husbandry in forest is new subsistence activity launched at 1993. These changes affect land use pattern in the village. The fields spread out widely around the village at 1980s, while congregated in the area lower than at a height of 1000m asl at 2003.

③ There is possibility that Opium culture control by government and land allocation by Forest Department play a important role in change of subsistence activities and land use in the village. But more study

and information are needed to discuss subsistence activities change and its transition in the village.



写真1. 畑地全景  
主にトウモロコシと陸稲が栽培される  
(2003年10月27日筆者撮影)



写真2. トウモロコシ収穫の様子  
トウモロコシの収穫は村民共同で行われる  
(2003年10月29日筆者撮影)



写真3. 捕獲されたブタバナアナグマ  
連れていた犬が捕まえたもので、特に猟に出て  
いたわけではない。  
(2003年10月28日筆者撮影)



写真4. 「休閒林」尾根部の様子  
村の南側の山に「休閒林」が広がっている  
(2003年11月7日筆者撮影)



写真5. 陸稲収穫の様子  
ジップと呼ばれる道具を用いて穂摘みが行われ  
ている (2003年11月12日筆者撮影)